



2022年7月11日

株式会社立花商店 生田 渉

(新) 週刊カカオニュース第73号

毎度お世話になります。カカオトレーダーの生田と申します。今週のカカオニュースを配信させていただきます。

1. 7/9開催のコートジボアール・ガーナ両国政府とカカオ産業界のLID等の話し合い内容

7月9日（金）にコートジボアール政府（≒CCC）及びガーナ政府（≒COCOA BOD）とその共同組織であるCIGCI（コートジボアール・ガーナココアイニシアチブ）とカカオ・チョコレート産業界の代表企業との話し合いが行われ、弊社の駐在員が同会議に出席した。

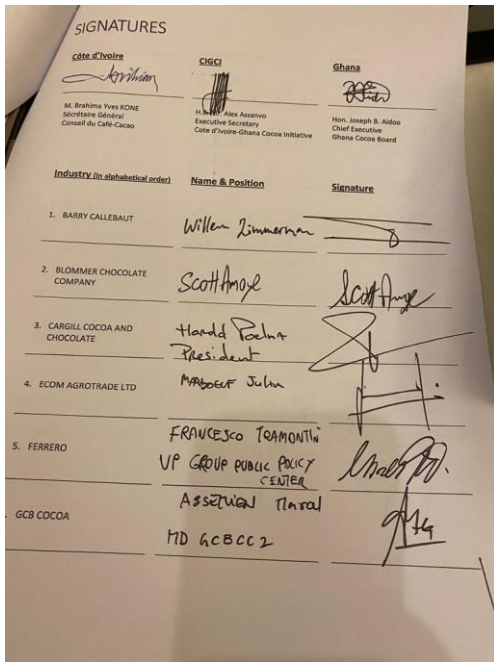
*会議で配布された資料についてご関心のある方がいらっしゃいましたら、共有致しますので、ご連絡ください。



一般的な内容については、下記の2のニュース内容をご参照いただきたいが、会議内の議論の主旨としては以下の通り。

- ・2019年にLIDが開始され、初年度は元々のカントリープレミアムに加えてLIDの400米ドル/トンを追加することが出来たが、次年度よりバイヤーサイドの戦力、思惑等によりカントリープレミアムが追加できない状況となり、計画していたような収益が得れていない。即ち、輸出価格の70%を支払うと約束したカカオ生産者への支払いが十分でない
- ・現状の状況は元々のLID制度の目的に沿うものではなく、正しいLID制度の運用に向けてルールと運用方法の再構築をカカオ業界と一緒に作り上げたい。
- ・今回の目的は、あくまで生産者の最低賃金（最低収入）を担保し、更に向上させるための議論であり、真のサステナビリティの実現の為に必要である。

- ・欧州委員会（EU）でのカカオに関する新法制度などにもカカオ価格の維持などが明確に定められておらず、EU等からの要件である森林破壊の抑制や児童労働の撤廃に向けた取り組みにおいても価格の維持・向上は必ず必要
- ・上記のコンセプトに産業界に改めて同意を求め、産業界の内外から専門家にも新しいルールと運用方法を定めていく為の話し合いに今後参加してもらい、期限を決めて制定していきたい。



2. カカオ産業界、コートジボワールとガーナのカカオプレミアム制度の支持に合意 (7/10)

世界の主要なカカオ豆のバイヤーは、カカオ生産者の貧困と戦うために金曜日に合意されたことの一部として、コートジボワールとガーナによって販売されるカカオ豆に適切なプレミアムを支払い、価格下限を支持することに同意した。

カカオ産業関係者は、世界のトップ2カ国のカカオ生産者であるコートジボワールとガーナが販売するすべてのカカオ契約に対して、1トン400ドルの固定「生活所得格差」（LID）を支持する。

また、バイヤー側は、両国のカカオ規制当局が1トンあたり2,600ドルの最低目標価格に到達できるよう、カントリープレミアムを支払う。これにより、農家は輸出最低目標価格の2,600ドルの最低でも70%を獲得できる見込みである。

署名した企業にはハーシー、マース、プロマーチョコレート、ネスレ、スクデン、モンデリーズ、トゥートン、バリーカレポー、カーギル、フェレロ、オラム、イーコム・トレーディング等が含まれている。

両国とも、2019年当時に設定したLIDルールに基づいた価格決定方法での目標を達成するのにとても苦労しており、コートジボワール・ガーナ・ココア・イニシアチブ（CIGCI）が新たに産業界と協力して価格メカニズムの再構築、是正に再度取り組むことになった。

CIGCIと両国のカカオ規制当局は共同声明で、「カカオのバリューチェーンに関わる企業は、コートジボワールおよびガーナの政府と会談し、農家の生活所得を達成する道筋への出発点としてLIDへの支援を新たにしました」と述べている。

ToutonのCEOであるPatrick De Boussacは、同社が生産者の収入を改善しようとしていることを述べました。

「私たちが今日署名したのは、カカオの生産者へのより良い報酬です」

コートジボワール・ココア&コーヒー協議会 (=CCC) のイブ・ブラヒマ・コネ最高責任者は、企業が LID の本来のコンセプトを達成しようとする両国の足を引っ張り、業界をより持続可能なものにする努力を妨げている側面があると指摘しました。

「今回の協定の目的は、カカオのバリューチェーンに関わるすべての関係者がそれぞれの役割を果たし、その約束を尊重することです」と述べました。

3. ガーナココボッド、22-23年に15億ドルのシンジケート・ローンを目標に掲げる(7/8)

ガーナ・ココア委員会=ココボッドの財務管理部長レイ・アンクラー氏は首都アクラでのインタビューで、同組織が10月に始まるシーズンに全国の生産者からカカオ豆を購入するために15億米ドル(≒約2千億円)を国際銀行団から調達することを目標としていると述べた。尚、同組織は、今年度も同額を調達した。

4. アフリカ・カカオ UPDATE : 雨のため農地へのアクセスが悪く、肥料の問題が継続(7/4)

- ・コートジボワール、ナイジェリアでの大雨は、再び輸送ルートを妨げている。
- ・西アフリカの生産者は投入資材のコスト高を懸念

カカオのトップ生産者であるコートジボワールでは豪雨により、生産者が農園にアクセスしたり、収穫した豆を輸送することが再び困難になっている。前週に少し和らいだものの、先週は再び豪雨が降った。作物には概ね好条件だが、道路が冠水したため、生産者が農園で作業をしたり、収穫したカカオを販売する地域に運んだりすることが難しくなった。

「道路はまだダメージを受けている」コートジボワール西部の Tai で農業を営む Issiaka Traore 氏は、「このままの雨量が続けば、農園の維持に不安が残る」と述べ、「肥料も不足している」と付け加えた。南西部や東部の生産者からも、樹木の入手に不安があるとの声が聞かれた。

生産量第2位のガーナでは、アクラ北部のクワベンで農業を営む Boadi Yeboah 氏によると、「先週は大雨と日照りが重なり、作物に好影響を与えた模様。それでも、農薬や燃料などの農園運営に必要な資材の高コストが利幅を圧迫し、カカオ産業全体の利益を脅かしている」と述べている。

西アフリカの他の地域では、ナイジェリアでも雨が作物に恩恵をもたらしていますが、道路の損傷が農園へのアクセスに影響を与えています。南東部の Ikom 近郊の生産者、Atangba Bonjor 氏は、樹木に農薬散布が雨の影響でできない生産者は、ブラックポッド病をかなり心配している。

カメルーンでは、先週雨が弱まったため、生産者はより多くの作業を行うことができるようになったと、同国中央部のヤウンデの北にあるオバラの生産者、アンリ・ミシェル・アタンガナは述べた。しかし、肥料代の高騰は依然として懸念材料との事。

5. カメルーン、カカオとコーヒーの収穫を促進するために農家にボーナスを支給(7/5)

カメルーン政府が運営するカカオ・コーヒー開発基金 (Fodecc) は、両作物の生産を促進するために生産者への資金分配を開始したと、Fodecc の管理者である Samuel Donatien Nengue 氏 (以下、ネングエ氏) が月曜日に述べました。

「我々は先週、東部地域で500のカカオとコーヒー生産者に資金を分配し始め、この活動は全国のカカオとコーヒーの生産地で継続されます。」彼は、63億CFAフランのうち15億CFAフラン(約289万ドル)が、ガブリエル・ムバイロベ農業大臣の監督の下、農民たちに分配されたと述べました。

Agri 4 Farmers プロジェクトは、カメルーン政府が 2019-20 年シーズンの 257,151 トンから 2030 年までにカカオ豆の年間収穫量を 64 万トンに、またロブスタとアラビカのコーヒーを 2020-21 年シーズンの 1 万 2000 トン強から 16 万トンに共同で引き上げる計画の一環として実施されています。

この取り組みは、1 年以上前に開始され、生産者は生産者の身元、農園の地理的位置、農園の量的状態、植物の年齢などの情報を含むインターネットアプリケーションを通じて、資金提供の恩恵を受けていると、ネングエ氏は述べた。

6. ナイジェリアのジョンベンツ社、オンド州の農家 15 万人に能力向上 (7/8)

ナイジェリアのオンド州では、カカオ磨砕加工会社であるジョンベンツ・インダストリーズ社（以下、ジョンベンツ社）が、約 15 万人のカカオ農家に生活能力向上のプログラムを実施している。

このエンパワーメントプログラムには、農民へのトレーニングや農薬の提供などが含まれます。また、殺菌剤、殺虫剤、除草剤、改良型カカオの苗木なども、これらの農家に配布されました。

プログラムの中で、ジョンベンツ社のマネージングディレクターであるジョン・アラム氏は、「このイニシアティブはエンパワーメントのツールであると同時に、持続可能な農業という世界的なニーズへの対応であると語った。このプロジェクトは、今後 5 年から 10 年の間に、約 30 万ヘクタールの農地において、15 万人の農家にカカオの木のリハビリテーション、再生、植え替えが出来る力を与えることを目的としています」と述べました。

「持続可能な農業は、何百万人もの生産者とその家族の生活、そして消費される最終製品の品質と本質的に且つ密接に結びついています。」このため、このプログラムでは、RA2020 に基づき、より弾力的で包括的な農業の実践に向けた道筋を作ろうとしているのです。このプログラムでは、児童労働、強制労働、差別、職場暴力、ハラスメントなどの人権侵害を一切許さないことに重点を置いています。

「このプログラムは、生産者と労働者が自分自身と家族のためにより良い労働と生活条件を実現し、彼らの人権と労働の権利を守ることができるようにすることを目的としている」「このプログラムは、農家から小売店までのサプライチェーンを通じて製品を追跡する強固で透明なシステムを通じて、世界のカカオのトレーサビリティを実現する事も目標としています。私たちは、認証されたカカオが本当に持続可能な基準に従って生産されたものであるという証拠を確信をもって、ユーザーの皆様に提供することができます。」

「これらの基準を遵守することで、私たちは地球、森林、生物多様性、水、気候に良い影響を与えることができるのです。私たちの持続可能性への取り組みは、私たちが、森林減少や森林劣化、その他の自然生態系の破壊に寄与しないようにすることで、森林やその他の自然生態系を保護・回復するものです。」

ロティミ・アケドル州知事は、農業・アグリビジネス担当上級特別補佐官アキン・オロトゥの代理として、州の農業を支援する取り組みの一環として、州内の農家に新たに 100 万本の改良カカオの苗木を配布したと発表しました。アケドル氏は、「ナイジェリアと我がサンシャイン州（オンド）にとって、カカオが経済的に重要であることは言うまでもないことです」「カカオはナイジェリアの農産物輸出の第一位であり、現在でも石油に次ぐ外貨獲得源となっています。」

「一方で、ナイジェリアカカオの重要性にもかかわらず、その生産には多くの問題があり、生産物の品質低下とそれに伴う収益の損失、または消費国でのナイジェリア豆の受け取り拒否などの課題を残していますが、この問題は正にこのジョンベンツプロジェクトが解決しようとしているものであり、完全に根絶されるものと確信しています」と説明している。

7. ナイジェリア、クロスリバー州のカカオに降雨によりブラックポッドが発生 (7/9)

ナイジェリア・クロスリバー州のカカオ農園でブラックポッド病が発生し、生産に影響を与えているとナイジェリア・ココア協会のポール・オジョン全国事務局長が金曜日に述べた。

「クロスリバー州は、天候に恵まれず、雨の日がほとんどです。このように雨が多いと黒色に変色したさやが発生するのです。」

オジョン氏は、日照不足のためにカビが生えたカカオが出るのが懸念されるとし、彼の倉庫では6~7%のカビが発見されたと付け加えました。

国際基準では、カビの生えた豆は、カカオ豆の販売契約時には全体の3%未満であるべきとされています。

トレーダーの Fola Adelaja 氏は、通常、クロスリバー州では大雨と日照不足が起こると、このような高い割合のカビがカカオ豆倉庫で発見されることが多いと話す。このようなカカオのカビは現在いかに雨が多くカビの危険性が高まっているかを示している

クロスリバー州はナイジェリア南東部最大のカカオ生産地区で、南西部のオンド州に次ぐ国内第2位の生産地区である。ナイジェリア気象局は、2022年の気候予測の中で、ナイジェリア南東部のカカオ生産地域の各州の年間降雨量は3,000ミリメートル(118インチ)と予想しています。

オンド州農業省のカカオデスク、トバ・アデノウロ氏によると、カカオの木がよく育つには1シーズン平均1,200ミリの雨が必要だという。オジョン氏は、クロスリバーではまだミッドクロップの収穫が続いているが、2022-23年シーズンのメインクロップの収穫は来月か9月に始まる見込みなどで、ミッドは間もなく終了すると述べた。ナイジェリア南東部の州様なカカオ生産州は、クロスリバー、アビア、アクワアイボムの3州です。同国の業界団体によると、同国の年間カカオ生産量28万トンのうち、約3割を占めている。

8. コートジボアール新物、6/27-7/3の週間着荷数量は25,053トン(7/5)

政府のデータに詳しい人物によると、コートジボワールの生産者は先週、25,053トンのカカオを港に出荷した。前年同時期の数量は113,978トンであった。10月1日のシーズン開始からの総着荷数量は、約229万トンとなっており、過去最高であった昨年同時期の推定値232万トンに近い数字

下記は、同国内のカカオ豆の買受先の一覧である。最大の買い手は、バリーカレボアのグループ企業であるSaco社や、Olam Internationalの関連企業であるOutspan、やCargillなどの企業である。

以下は、10月1日から7月3日までの上位各社の購入量(単位:トン)の表である。

会社名	購入数量(トン)
カーギルグループ	307,103
Saco社(バリーカレボアグループ)	290,739
アウトスパン(Olamグループ)	285,478
Touton社	146,136
S3C社	143,529
その他企業	1,121,380
合計	2,294,365

「世界史を変えた」チョコレート

我々が日頃お世話になっている食べ物がいつ頃から世界に広まったのか、といった歴史的背景を知りたくなったら、専門書よりも『図説 世界史を変えた50 の食物』（ビル・プライス著、井上廣美訳、原書房、2016年）あたりを読んだほうが知的好奇心を満足させることができるだろう。この図説本には50の食物を巡る歴史エピソードが記載されており、文章ばかりか写真や挿絵も楽しみながら読めるからだ。このイギリス人作家が書いた面白本では、15番目に登場するのがチョコレートである。「たいていの人はチョコが大好きで、チョコがまったくもって好きではない人がいるとは信じがたい。チョコレート関連の事業は、いまや全世界で年間300億ポンドに相当し、しかも急増しているといわれている。ということは、500年前に母国の中米からやってきたチョコレートは、他の食べ物にはめったに見られないような形でわたしたちの心をつかんだということだ。」という書き出しから始まって、中米マヤ文明の古典期（4世紀頃）にはチョコレートは存在していた、という起源から、侵略者スペイン人が16世紀になって欧州へチョコをもたらした経緯が書かれている。

1828年オランダのチョコレート製造業バンホーテン社がカカオ豆からココアバターを取り出してココアパウダーを作るプレス機を開発したおかげで、「ダッチプロセス」と呼ばれる製法が確立され、現在もこの製法がチョコ作りの主要工程となっている。この技術革新を契機として、欧州におけるチョコの生産も消費も拡大していった、

カカオ/チョコレート経済の大きさ

ざっくりとした数字ではあるが、全世界のカカオ/チョコレート関連経済規模は、原料豆で500万トン以上、扱い高（推定）は120億ドル、栽培現場や加工場で働く人数は600万人以上、と実に大きな経済活動である。

ここで、まず、全世界（国別）とブラジル（州別）の最新の生産量を確認しておこう。

①世界の主要カカオ生産国ランキング

FAO（国連食料農業機構）の最新統計（FAOSTAT 2021）によれば、2019年度のカカオ生産国ランキングは下記の通りだ。（単位：1,000トン）

1. コートジボワール…………… 2,180
2. ガーナ…………… 812
3. インドネシア…………… 784
4. ナイジェリア…………… 350
5. エクアドル…………… 284
6. カメルーン…………… 280
7. ブラジル…………… 259
8. ペルー…………… 136
9. コロンビア…………… 102
10. ドミニカ共和国…………… 89

②ブラジルの州別カカオ生産量/植付面積

（2020年度）は、

1. パラー州：144,663トン／150,066ha
2. バイーア州：118,018トン／425,045ha

3. エスピリトサント州：11, 271トン／ 17, 185ha

4. ロンドニア州：5, 069トン／ 9, 208ha

5. アマゾナス州：1, 266トン／ 1, 916ha

6. マトグロッソ州：366トン／ 629ha

(ブラジル全体:280, 661トン／ 604, 062ha)

全世界へ広がったカカオ栽培

植物学的起源はアマゾンとみられているが、中米を栽培起源とするカカオの栽培地が世界中に広がっていった歴史をみておこう。カカオを中米から欧州に持ち込んだのはスペイン人だが、フランスは17世紀中ごろにはカリブ（マルチニークや仏領ギアナ）での栽培を開始している。ブラジルのアマゾン盆地でのカカオ栽培は17世紀に始まったが、18世紀末の生産量は千トン程度、19世紀後半で4千トンほどだった。アジア地域では、スペイン人がフィリピンへカカオ苗を導入したのは17世紀後半で、そこからオランダ人がインドネシアのジャワ島にカカオに持ち込んだの

が18世紀後半であった。また、アフリカで19世紀前半に最初の本格的なカカオ栽培が始まったのはポルトガル領のサントメ・プリンシペ島で、20世紀初頭には年間3万トンも産出していた。現在カカオ生産の主産地となっている西アフリカのガーナやコートジボワールにカカオ苗が導入されたのは19世紀中ごろだったが、カカオ農園が本格的に広まるのは19世紀末である。

ブラジルにおけるカカオ栽培小史

バイーア州南部にカカオ種子が持ち込まれたのが1746年であったが、カカオ栽培が拡大されていったのは19世紀後半以降だ。

バイーアでのカカオ生産量は、1845年181トン、1905年1.7万トン、1922年5.6万トン、1935年12万トン、1958年18.4万トン、1971年20.7万トン、1981年27.6万トン、1985年36.1万トンと、1960年代から80年代にかけて急速に増大したが、1986年39.7万トンをピークとして、その後激減してしまう。

減産の原因は、旱魃（1987年）と病害（1989年以降フロスティー・ポッド病が蔓延）であったが、1991年の25.4万トンから1999年には9.6万トンと10万トンを割ってしまった。バイーアにおけるカカオ栽培再興の諸努力（品種改良、ハイブリッド苗、アグロフォレストリー農法や有機農法など）は現在も継続中であるが、生産量は、2001年15.7万トン、2003年13.6万トン、2018年12.2万トン、2020年11.8万トンと、横這い傾向は変わっていない。

このバイーアのカカオ生産量が減少した結果、世界のカカオ生産国ランキングでは、ブラジルはかつての2位ないし3位から、現在では7位にまで後退してしまった。が、パラ州における増産が確実に具現化してきたおかげで近々のうちに4位あたりに返り咲く可能性は高い。

パラ州におけるカカオ栽培

アマゾン地域におけるカカオ栽培は17世紀に始まったものの、栽培面積や生産量が目に見えるレベルで急増したのは、つい最近の

21世紀に入ってからである。この略史を追いかけてみよう。まずは、1970年代の軍事政権によるアマゾン開発に時計の針を戻す必要がある。

1970年のPIN（国家統合計画）の目的は、①アマゾンへの移民によるノルデスチ貧困層の撲滅、②広大なアマゾンの防衛、③国家の

安全保障、であったが、その国家統合の手段としてトランスアマゾニカと称されたアマゾン横断道路（BR230）を突貫工事で開通させる。

1974年にはPOLAMAZONIA（アマゾン農牧畜・農鉱業開発プログラム）が策定され、パラ州中央部に位置するアルタミラ、メディシランディアといった現在カカオ栽培の中心地となっている町が開拓される。この地名は、当時のメディシ大統領にちなんで命名（メディシの土地という意味）されている。まさに軍事政権の“目玉開発政策”であった。

この北伯開発計画の一環としてPROCACAU（カカオ栽培振興計画）が1976年に策定されたが、その目標数字は、10年間でカカオの栽培面積を30万ha拡大するというものであった。その30万haの内訳はアマゾン16万ha、バイーア14万haとなっており、この時点からアマゾン地域におけるカカオ栽培地を増やそうとの発想があったことがわかる。

そうした計画通りにはいかないのがブラジルの開発計画であり、アマゾン地域でのカカオ栽培についても様々な長めの途中休憩“があった。そうした段階を経て、実際の生産拡大が具現化してくるのである。

その最大の転機といえるのが、アグロフォレストリー農法の確立であった。周知の如く、胡椒に代表されるモノカルチャー農法が壊滅的な被害を受けたことから、トメアスー農協の人たちが試行錯誤の末、「農業と森林の共生」といえるアグロフォレストリー農法を生み出したのが1990年代であった。様々な種類の植物・農作物・樹種を組み合わせる農法が成果を出し始め、そのノウハウをアマゾン近隣地区の農家にも開示したことで、アマゾン地区全般の“持続可能な農業と環境の共存”が農産物収穫量の増加をももたらし始めたからだ。

21世紀に入ると、ハイブリッド苗の生産・配布を始めとする農家支援体制が、州政府レベルでも地元市町村レベルでも具体化し、これがパラ州全般のカカオ生産量の増加という好循環をもたらしている。

CEPLAC（カカオ栽培計画執行委員会）やパラ州政府の資料に基づいて、パラ州のカカオ生産量推移（単位：1,000トン）をみてみよう。

1970年1.5 ⇒ 1975年1.7 ⇒ 1980年8 ⇒ 1985年22 ⇒ 1995年15 ⇒ 2006年36 ⇒ 2008年52 ⇒ 2010年62 ⇒ 2011年72 ⇒ 2012年85 ⇒ 2015年106 ⇒ 2016年86 ⇒ 2019年130 ⇒ 2020年144

となっているので、過去50年間で生産量はほぼ100倍へ増大したことがわかる。

最近の収穫面積（単位：1,000ha）の推移は、2010年80 ⇒ 2012年94 ⇒ 2015年128 ⇒ 2021年188となっているので、パラ州におけるカカオ栽培が本格化したのは、つい最近といってもよいだろう。

こうしてカカオ栽培主産地へ成長したパラ州は、2019年にはじめてバイーアを抜いてブラジル最大のカカオ生産州となった。（バイーアの10.5万トンに対しパラ州は13万トン、翌2020年は、パラ州14.4万トン、バイーア11.8万トン）もう一点注目すべき点は、生産性の高さだ。2020年のデータによれば、単位面積（ha）当りの生産量は、パラ州の964kg/haに対し、バイーアは277kg/

haであったから、パラ州のほうが3倍以上の生産性がある。パラ州政府としては近い将来の目標生産量24万トンという方針を出しているが、恐らく2030年ごろにはこの目標を達成するだろうと関係者はみている。

参照）発行元：日本ブラジル中央協会 【ブラジル特報5月号】より

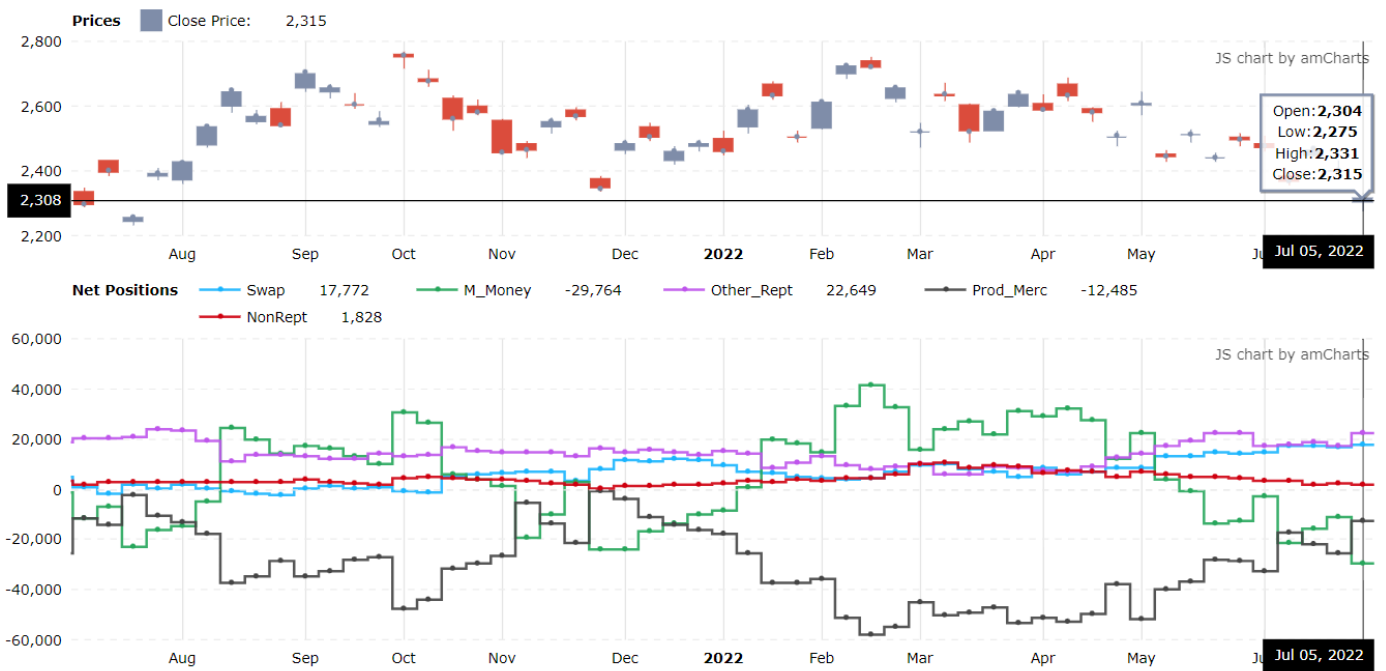
10. ファンド勢のNY先物は純売り越しポジションが増加し3年ぶりの弱気水準(7/9)

ニューヨークのカカオ先物市場において、ヘッジファンド等投機筋（Managed Money）は今週、純売り越しポジションを18,616ロット増加（先週は4,488ロット減少）させ、29,409ロットとした。毎週発表されるこのポジションレポートの取引数字は毎週火曜日まで、（今週で言えば、7月5日）の取引が含まれている。

- 純売り越し数量は過去3年間で最も多い＝最も売られている。
- 総買い数量は 901ロット減少（先週1,648減少） し、65,008 となった。
- 総売り数量は 17,715ロット増加（6,136減少） し、94,417ロット となった。
- 総売り数量は、過去のデータの中で最も多い数字

参考分析資料；過去1年のNY市場の実需家VS投機筋のポジションと相場価格

Prices & Net Positions



黒線・・・カカオ磨砕業者やチョコレート製造会社など実需家

緑・・・ヘッジファンドなどの資金運用者

水色・・・投資銀行などスワップディーラー

11. ファンド勢のLDN先物は純売り越しポジションに移行(7/9)

ロンドンのカカオ先物市場において、ヘッジファンド等投機筋 (Managed Money) は今週、先週の純買い越しポジション 920 ロットから純売り越しポジション 8,747 ロットとした。毎週発表されるこのポジションレポートの取引数字は毎週火曜日まで、(今週で言えば、7月5日) の取引が含まれている。

- 純売りポジションは過去 6 か月で一番多い数字 (≒最も売られ過ぎ) の状態。
- 総買い数量は今週 1,790 ロット減少し (先週 1,228 ロット減少) し、18,789 ロットとなった。
- 総買い数量は過去 11 か月で最も低い。
- 総売り数量は **7,877 ロット増加** (先週は 1,904 ロット減少) し、27,536 ロットとなった。
- 総売り数量は、過去 6 か月で最も多い数字

参考) ロンドン市場の主要なプレイヤーのポジション状況

Commitments of Traders Futures and Options

ICE Futures Europe

05/07/2022

MktDate	OI	Producer/Merchant/ Processor/User		Swap Dealers			Managed Money		
		Long	Short	Long	Short	Spreading	Long	Short	Spreading
05/07/2022	291312	170446	168701	32130	32023	20154	18789	27536	12190
Percent of Open Interest Represented by each Category of Trader									
05/07/2022	100%	58.5%	57.9%	11.0%	11.0%	6.9%	6.4%	9.5%	4.2%
Number of Traders in Each Category									
05/07/2022	144	51	43	12	9	12	16	26	16

12. トレンド情報：日清オイリオグループ：「大豆調達方針」「カカオ調達方針」を策定(7/7)

日清オイリオグループ株式会社（社長：久野 貴久）は、このたび、「大豆調達方針」および「カカオ調達方針」を策定しました。

当社グループは、すべての原材料・サービス等の調達活動の指針となる「日清オイリオグループ調達基本方針」を2018年6月に策定し、当社グループが扱う主要原料のうち、パーム油については、個別の課題をふまえた「パーム油調達方針」を定め、具体的な取り組みを進めてまいりました。今回、大豆およびカカオ調達における社会・環境課題を踏まえ、新たに当社グループの「大豆調達方針」「カカオ調達方針」を策定いたしました。

「日清オイリオグループビジョン2030(※1)」における重点領域「信頼でつながるサプライチェーン」を具現化していくために、今回策定した「大豆調達方針」「カカオ調達方針」に基づき、将来にわたって安定したサプライチェーンの構築に努めてまいります。

■「大豆調達方針」策定の背景と今後の取り組み

世界の大豆生産地の一部では、森林破壊や人権に関する課題が指摘されています。当社グループでは、調達先の生産地における大豆の生産や物流に関する実態調査を継続しています。今後は、実態調査を継続して実施するとともに、環境への配慮や人権の尊重についてサプライチェーンへの働きかけを行うなどの取り組みを進めてまいります。

■「カカオ調達方針」策定の背景と今後の取り組み

世界のカカオ主要生産地においては、森林破壊や児童労働などの課題が指摘されています。当社グループではこれまでに、世界カカオ基金への参加やレインフォレストアライアンス(RA)認証、フェアトレード(FIT)認証の取得などの取り組みを行っています。今後は、カカオを調達している商社およびサプライヤーなどのサプライチェーンと協働した課題解決への取り組みを進めてまいります。

大豆調達方針：

日清オイリオグループは、主にアメリカ、ブラジルから大豆を調達し、製品を製造して、お客様に供給を行っています。原料の調達に際しては「日清オイリオグループ調達基本方針」に基づき、持続可能性の向上に取り組んでいますが、大豆の調達に際しては、生産地における環境への配慮、人権の尊重について、サプライチェーンを通じた改善に重点的に取り組み、持続可能性の向上により一層努めて参ります。

- ・ 私たちは、生産地における森林破壊の防止やCO2排出量削減などの環境への配慮、人権の尊重について、持続可能性に配慮したサプライヤーから大豆を調達します。
- ・ 私たちは、大豆生産国における大豆生産、物流に関する実態調査を継続して行い、サプライチェーンを通じて持続可能性向上に向けた取り組みを行っていきます。また、持続可能性に対する課題が発生した場合には、サプライヤーと連携して、課題の解決に取り組めます。
- ・ 私たちは、大豆の持続可能性向上を目的とした認証制度の調査を進め、必要に応じて認証団体との連携や、認証大豆の調達を行います。

カカオ調達方針：

日清オイリオグループは、当社グループのカカオサプライチェーン上で生じる社会・環境的課題への解決に向け、下記の方針にもとづいて取り組みを推進していくことを通じて、持続可能な社会の実現・発展を目指して参ります。

- ・ 私たちは、違法な児童労働や森林破壊のないカカオの調達に努めます。
- ・ 私たちは、当社グループのカカオサプライチェーンに関わるお取引先さまと協力しながら、サステナビリティに配慮したカカオの調達とその正確なトレーサビリティの維持に努めます。
- ・ 私たちは、当社グループのカカオサプライチェーンにおけるサステナビリティ、トレーサビリティの継続的な改善に努めます。
- ・ 私たちは、サステナビリティに配慮したカカオに対する顧客および消費者理解の醸成に努めます。
- ・ 私たちは、当社グループのカカオサプライチェーン上で問題が発生した場合は適切に対応します。
- ・ 私たちは、当社グループのカカオサプライチェーンにおけるステークホルダーとの取り組みについて定期的に報告します。

※目標は社会・環境の変化や新たな知見等に応じて改訂することがあります。

上記の元記事は同社プレスリリースより：<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000036.000076174.html>

週刊カカオニュースの配信の削除、ご依頼については、下記アドレスまでご連絡願います。

株式会社 立花商店 生田 w-ikuta@tachibana-grp.co.jp

*本ニュースの相場情報は、客観的なデータの報告及び、著者の主観的な意見を述べるものであり、一切の取引の推奨を目的としたものではありません。カカオ先物、及び現物の取引におかれましては各個人様、法人様のご判断に基づいて行って頂きますようお願い致します。